

日蓮宗学説史……………	望月歆厚 著
近代日本の法華仏教……………	望月歆厚 編
近代日本の政治と宗教……………	中濃教篤 著
中山法華経寺史料……………	中尾 堯 編著
木村泰賢全集……………	木村泰賢 著
社会科学と現代仏教……………	孝橋正一 著
ユートピア以後……………	ジュディス・M。シユクラール 著
何のための豊さ……………	奈良和重 訳
孤独の群衆……………	加藤秀俊 著
周武法難の研究……………	野村耀昌 著
現代に生きる宗教者の証言……………	日本宗教者 平和協議会 編

日蓮宗学説史

望 月 歆 厚

本書は坂本日深博士の序にもある通り、望月歆厚博士が立正大学において、大正十四年四月から昭和六年三月まで

日蓮宗学史として講ぜられた講義の全貌である。望月先生四十四歳から五十歳に至る円熟期のこの講義ノート二十冊は今まで篋底に秘せられていたが、日蓮宗宗務院・立正大学々園・小西法縁の賛助により、はじめ米寿頌寿記念として刊行を計画されたが、先生の遷化により遺稿として出版されたもので、本文九八四頁、全体では一〇三〇頁に及ぶ大著である。講述されてから四十数年の時をけみした本書は、日蓮宗学史として最初の講述であり、ある意味では古典的存在であるにもかかわらず、日蓮教団の学匠七十余師の学説を六十八章にわたって検討した展望と諸師の学説を本尊論・本仏論・題目論・修行論・成仏論・戒壇論という論点から詳細に検討された精密さによって、現在においても新鮮な論述であることに驚異を禁じ得ない。

先生は明治四十三年、日蓮宗大学本科卒業論文として「寿量所顕本覚三身論」を提出、所論の適格と論述の明晰とを認められたが、この論文に先生の問題の核心があったと思うのである。その後、「本宗先師の見たる山家山外」「日隆聖人の顕本論について」「第三の信」「日蓮聖人の仏陀観」等が大崎学報に執筆掲載されているが、大正八年（三八才）から大正十一年（四一才）まで日蓮宗大学給費研究員、同年から大正十四年（四四才）まで日蓮宗学史

研究の爲内地留学をされている。本書はそうした研究期間を経て、大正十四年四月から講ぜられたものである。本書が日蓮宗学、説史と称せられるように、先生の学説史研究は宗学樹立のための資料としての研究であつて、宗学の究極を主体的な宗義の探究に置いた。即ち、教理史研究の「最高目的は、史的変遷の帰結に於て宗学の定義に資し、人格の醇化を企画するものなり。故に研究の態度に於ては客観的なれども、その最高目的は主観の完成に在りと云ふべし。」(緒論)と述べる。

従来、「宗教と歴史とは相反的傾向を有する」として、「その教義を史的に考察すること」は困難と見られてきた。宗教が「信仰と、伝統的精神を有するが故に、その教を客観的に見て純粹批判を下す」ことが容易でないと考えられた爲であつたが、それは「研究者の態度如何の問題にして、歴史と宗教との本質的問題」ではないとし、宗学史研究の態度を次のように結論する。

要するに宗学史研究に於ては純學術的に之を取扱ひ、之れが闡明し尽されたる上は、之を以て宗学(宗・学とは吾人の信仰の科学的祖述を云ふ。即ち吾人の人格と宗祖の人格と合一する全人格体の研究なり)に帰結せしむるに在り。(緒論)

先生が学説史の客観的研究により、主体的信仰の資としそこに「信仰の科学的祖述」を企図したのはいかなる理由からであろうか。恐らく、従来の宗学研究が、木を見て山を見ず、宗祖滅後六〇〇余年の先師の教学を部分的に抜きとつて所謂祖述的態度をとつて来たのに対し、一には先師の所説を總體的に把握、二にはそこに見るべき所説を顕正し、批判すべきは批判して、今日における日蓮宗学の体系を造りあげようとしたのではあるまいか。それによつて、日蓮宗学のロゴスの体系が顕示でき、諸宗乃至諸学に比肩することができると考えられたのではあるまいか。

さて、教理史研究の分野としては、第一に法華経流伝史等、宗祖の教学の「思想系統を主題として研究する」源流史、第二に「宗祖の全人格を対象とする發生的研究」としての成立史、第三に宗祖滅後諸師の宗学の「時代と人格とによる史的發達変遷」を検討する宗学史、の三分野を措定する。

本書における宗学史研究の方法は、問題中心でなく、人格中心である。①即ち、「各先輩の教学は即ちその人格の表現にして吾人の宗学信仰は皆先輩の人格を築き上げた」ものであるから。②「問題中心は結果に現れたる影響を明らかに」し得ても、「その眞実を捕捉する点に於て人格中

心の研究に劣る」から。③まずこのような研究を「基礎として次に思想史に入れるのが適當」であるから。こうして、「教学史上の問題」が宗教・宗旨に分けて挙げられている（二〇—二三頁）。

「本書の構成組織」及び「本書の梗概」は巻末の故執行海秀教授の解説に要領よく述べられているので、これを手引とするとよいであろう。

今は二・三の点について記しておきたい。
本書の構成は次の五篇より成っている。

第一篇 直弟流伝時代

六老僧の他、天目・日印・日常等直弟の教学

第二篇 分派確執時代

直弟時代以後、室町末期頃までの身延・池上・比企・像門・六条・常門・昭門・日興門家・永正
論講の各系の諸師の教学

第三篇 講学論議時代

I 宗風一変時代

天文以降寛文盟約までの諸師の教学（三光会諸師・承慧日修・重・乾・遠三師、常葉日経・仏性日奥・不受論者・什門諸師・智門日求・舜統日迥）

II 宗学醞釀時代

以後享保に至る諸師の教学（元政・観妙日存・妙雲日承・安国日講・寛文度の受不学論許・慈眼

第四篇 宗学形成時代

日恵・一音日晡・蓮華日題・一妙日堯・禪智日好・観如日透・本寿日悦・堅樹日寛・六牙日潮・了義日達等）

第五篇 近世宗学の成立

優陀那日輝の宗学

ここで気付くことは、第一篇—第三篇は「教学」と呼称されているものが、第四篇で「宗学形成」、第五篇で「宗学成立」を標榜し、両期の諸師の宗学を「宗学」と呼んでいることである。

先生は、宗学の成立を優陀那日輝の充治園教学におき、その形成を一妙日導の祖書綱要に見、その醞釀を草山日政（元政）・観如日透等とし、それ以前は宗学醞釀・形成・成立に至る前階として考えられたものであろう。このことは第四篇宗学形成時代の第一章序説が不記となっているのでまとめて述べられてはいないが、断片的に記述されている。例えば、元政について、次のように評している。「宗学の第一声は草山によって叫ばれたり。併し元政は過渡期

にあれば、その組織せる宗学は未だ成就せられたるものにあらず。台学の領域を離れんと欲して未だ離れず、本化の壇上に登らんと欲して未だ全く昇らず。之を宗学醞釀時代の初というに稍当れるか。」(四六七頁)

また、観如日透を評して次のように述べる。「師の教学は頗る我が学界に波動を与へたり。真返は宗に背ひて一沫の覚醒剤を本宗に投じ、日透は派を改めて本宗に入り一道の清氣を学界に寄与せりといふべし。特に救年を以て成れる三書は、師の畢生の著書として宗学成立の木鐸として、之を後代に遺せるものといふも敢て過言にあらざるなり」

(五八〇頁)

そしてこのような宗学組織化の傾向は諸門流に共通するにとらえられた。「今本宗の宗学は日導によって組織せられたり。什・隆等の諸門に十年の遅れたるあるも、而もその整齐に於て前諸師の宗学を統合し、諸問題に涉つて本尊抄を中心とし、題目を本体として組織せる大功は一に日導の綱要二十三巻の著にありといふべし。」(七五八頁)即ち一妙日導の『祖書綱要』を宗学の形成と見る先生は、他門の大石寺日寛、隆門日憲、什門日受等の教学を、「宗学的意識の上に成立せる本化的教学なり」と見、江戸中期の各門流における教学組織化への擡動を指摘するのである。

第五篇近世宗学の成立において優陀那日輝の宗学を叙述すべく、第一章優陀那日輝(略伝・著書・学統)、第二章日輝の宗学序説(時代とその宗学傾向・儒仏論・仏教一般論並びに諸宗批判)、第三章日輝の教判論、第四章日輝の宗旨論の四章をたてている。優陀那日輝については、「和尚の学的傾向を見るに、当時の文明開運の大勢に応じて和尚の宗学は大に学解的傾向を帯び、徒に但信口唱の安逸に陥るを誡め、只管に世の進運に遅れざらんを期せり。……新なる宗学の勃興は宗家を救ふ所以にはなるとも決して宗家を破るにはあらざるべし。」(九三九頁)「和尚は実に一木能く頽屋を支へ得たるものといふべし。宜べなり、維新の宗門は充治園の人々によって成就せられたり。」(四一四頁)等と評するのである。恐らく輝師の宗学をもって近世宗学の成立として、ひたすらその宗学を顕正しようとしたものであろうか。(ただし、第四章は三大秘法論説本尊本体論が述べられるが、第三節本尊形態論は標題のみで欠けている。宗旨論という章の名から考えれば、叙述は続く筈であるが、以下は欠けている。立正大学論叢に第二章が掲載され、また日輝の神儒仏三道論についても掲載されていることから類推すれば、第五篇は第二次大戦中に書き続けられ、第四章第二節で留まってしまったのかとも推

考するのである。)

さて、「教学」と「宗学」の使いわけから考えて見ると以上のような本書の構成についての理解は誤りではないと思ふのであるが、全体は、各章ごとに或は節ごとに敘述された論文の集積であつて、非常に細かく論がすすめられている。先生の「教学史上の問題」(一〇頁)の分類に従えば、宗教の問題としては本迹問題が中心であらうし、宗旨の問題としては本尊論(本体論・形態論・本仏論・顕本論)、題目論(本体論・信行関係論・三業傍正論)、戒壇論(事理戒壇論等)、成仏論(受持即成論・来世成仏論・靈山往詣論・三益論)等が中心であらう。いわば、行の所対やありようをめぐるさまざまな問題が、先生の眼によつて尋討されていると思ふのである。従つて、随所に鋭い批評がちりばめられており、教学の本質がえぐり出される。例えば、大石寺日寛を評して、「師等石山の教学は概してその法門構成と所用の法相が独断的珍奇のもの多し。第三法門の解の如き、三衣の義の如き、特に名儀が本因妙抄・百六箇条に出でたるものなりと雖も、甚だ内容なき好奇的文字なり。」(六四八頁)と述べ、以下八項にわたつて批評を加えている。

以上、本書の構成の特色を中心に若干の紹介を試みたつ

もりである。望月宗学は本書のごとき基礎的作業あつてその堅牢を誇るものであらう。本書は近代宗学において燦然と輝く金字塔であり、宗学を志すものが必ず立ち入らねばならぬ業績である。(平楽寺刊) (渡・辺・宝・陽)

近代日本の法華仏教

望月 敏 厚 編

明治百年に當つての諸行事が官製であることの賛否は別として、近代日本の文化に対する関心が高まってきたことは事実である。ことに現在の思想混乱のときに當つて、日本の伝統的思想を見直そうと、中でも仏教思想に対する再評価の傾向が見られ、多くの業績が発表されている。しかしながら、法華仏教に関する限り、問題の複雑さ等から研究はやゝ立遅れの感があつた。それが多くの新興宗教の母胎となり、今日では単に宗教界に止まらず、社会的関心の的となつているとき、その研究の發展と成果の発表が待たれてゐた。このときに『近代日本の法華仏教』の完成を見